

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 7 月 31 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	若森 参

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
京都府、京都大学
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
第二回京都大学 - 稲盛財団合同京都賞シンポジウム
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 7 月 12 日
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
京都賞シンポジウムは、7月11日～12日の2日間開催され、エレクトロニクス分野、生物科学分野、音楽分野と別れており、私は、12日の生物科学分野に参加した。生物科学分野は「人類進化研究の最前線：遺伝子・化石・認知」と題し、4名の研究者が講演を行った。 Svante Pääbo 博士、Eske Willerslev 博士、諏訪元博士の講演では、なぜ我々ホモサピエンスは、現在のように世界の広い範囲に分布するに至ったかという話がなされた。手法としては、化石を用いて DNA 分析や形態分析を行うというものだが、ゲノム解析や化石の CT 撮像など、今現在の技術革新を経て可能となった研究であり、そこで見えてきた人類進化の歴史は、ロマンも感じる壮大なものであった。中でも、印象深かったのは、Svante Pääbo 博士の講演で、現代人のアフリカ以外の地域の人類は、1～2%ネアンデルタール人の DNA を持っているということを発見は、遺伝子が何世代にも継承していく情報のすごさに驚かされた。また、古 DNA は分解されていることが多く、研究の過程での他 DNA のコンタミネーションも防がなければならず、研究手法の開発に苦労したという話は、これほどの研究成果を出している人ですら大変なことがあるのかと驚くとともに、だれも取り組んだことのない仕事をする時やくじけそうになったときの励みになった。 平田聡博士は、チンパンジーとボノボの動画を交えて講演をされ、社会的知性を試す様々な実験の様子を見せ会場からは、映像で紹介されるチンパンジーやボノボの実験へのレスポンスに対して、明るい声が上がっていた。ヒトと遺伝的近縁種である彼らだが、紹介された行動にはチンパンジーやボノボで特有な反応もあり、ヒトの心の進化の奥深さについて触れることができた。 生物科学分野の総括としてのディスカッションでは、山極寿一総長も加わり、現代人はなぜこれほど世界に広がったのか？という疑問に対して、「海を渡った先に住めるような土地があるかどうか定かではないのに、海へ出て行った」という先人たちを例に、単に適応放散ではなく、好奇心がヒトの移動を突き動かしたのではないか、という話があり、脳容積の増加と好奇心の発達の関係もまた人類進化の歴史と深く関わるのだと思った。 有意義なシンポジウムに、霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の支援で参加できたことに感謝する。
<b>6. その他</b> (特記事項など)
写真撮影禁止の為、写真なし。